2022.1.22 GEWANDHAUS 龍ヶ崎ゲヴァントハウス【オリジナルCDコンサート】

ニューイヤー名曲コンサート2022

プログラム

2022年はニューイヤー名曲コンサートでスタートです。前半はバッハの名曲からピアノの名手リストとショパン、後半は北欧グリーグのしっとりとした名曲の後、一昨年生誕250年を迎えながら、多くの時間を使えなかったベートーヴェンの作品から交響曲第7番をお聴きいただきます。54歳という若さでこの世を去った名指揮者で、チェンバロ、オルガニストでもあった**カール・リヒター(1926~1981)**は1979年に来日してリサイタルを開きました。FM東京オリジナルコンサートで放送された2月19日と23日の演奏のうち23日の演奏はTDKによってCD化されましたが、19日の演奏は出来が良くなかったとの理由でCD化は見送られたと言います。しかし有名なトッカータとフーガの演奏が忘れ去られてしまうのは残念な事です。果たしてどんな演奏だったのか、皆さんの耳で確かめてみてください。圧巻のヴィルトゥオーゾぶりを発揮するのは“リストの再来”と言われたハンガリーの名手**ジョルジュ・シフラ(1921~1994)**の弾くハンガリー狂詩曲。1975年に18歳でショパンコンクールに優勝した**クリスティアン・ツィメルマン(1956~)**は歌心に溢れたロマンティックなショパンを聴かせてくれます。我らの**小澤征爾(1935~)**も充実した指揮ぶり。**バーバラ・ボニー(1956~)**の歌うグリーグの美しさは格別。**マリス・ヤンソンス(1943~2019)**のバックにも注目です。チェコの名指揮者**ヴァーツラフ・ノイマン(1920~1994)**の溌溂とした生命力溢れるベートーヴェンはウィーン・フィルとの相性の良さを感じさせる名演です。ごゆっくりお楽しみください。　(中川)

＊＊＊＊＊＊＊

ヨハン・セバスティアン・バッハ(1685~1750):
トッカータとフーガニ短調BWV.565
カール・リヒター(Org)
(1979.2.17　東京カテドラル聖マリア大聖堂でのLive)

フランツ・リスト(1811~1886)
ハンガリー狂詩曲第2番嬰ハ短調
ジョルジュ・シフラ(P)
(1980.7.3　オシアッハ修道院教会でのLive)

フレデリック・ショパン(1810~1849):
ピアノ協奏曲第2番ヘ短調Op.21
クリスティアン・ツィメルマン(P)
小澤征爾指揮ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団
(1982.6.27　ベルリン・フィルハーモニーホールでのLive)

＊＊＊ 休 憩 ＊＊＊

エドゥアルド・グリーグ(1843~1907):
ソルヴェーグの歌(劇音楽“ペール・ギュント”から)
春(12の歌Op.33　第2曲)
バーバラ・ボニー(sop)
マリス・ヤンソンス指揮オスロ・フィルハーモニー管弦楽団
(2000.4.13　ウィーン・ムジークフェラインザールでのLive)

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン(1770~1827):
交響曲第7番イ長調Op.92
ヴァーツラフ・ノイマン指揮ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団
(1990.10.14　ウィーン・ムジークフェラインザールでのでのLive)

★ホームページアドレス　http://gewandhaus.sakura.ne.jp/wp/

曲　目　解　説

バッハ：トッカータとフーガニ短調BWV.565

バッハの数多い作品の中でも最も広く親しまれている名曲で、ブゾーニによるピアノ編曲、ストコフスキーによる管弦楽編曲、更にはポピュラー音楽にも使われるなど、出だしだけは誰でも聴いたことがあるはずです。1702年に高等学校を卒業したバッハはすぐに自活する必要に迫られ、1703年3月に18歳でアルンシュタットの教会オルガニストに採用されます。1708年7月にワイマールの宮廷礼拝堂のオルガニストになると名声は高まり、若き大家と呼ばれるようになって行きます。このトッカータとフーガは1702年から1709年頃の間に作曲されたのではないかとされています。北ドイツ・オルガン楽派の中心的な存在であった**ブクステフーデ（1637～1707）**への傾倒ぶりからの影響を感じるものの、強烈な個性に支配されていて、冒頭のラプソディックなトッカータ、主題が次々と自由に展開して行くフーガ、そしてそのフーガが冒頭のように即興的に盛り上がってコーダを迎えるという3つの部分から構成されています。激しい感情の起伏を持った若きバッハの代表作。

リスト：ハンガリー狂詩曲第２番嬰ハ短調

リストの最も有名な作品のひとつである19曲のハンガリー狂詩曲は、最初の15曲が1853年、残りの4曲が1882年から1885年までに追加で出版されました。これはハンガリーで収集したジプシーの音楽やハンガリーの民族音楽をチャルダーシュ（ハンガリーの民俗舞曲で本来ジプシーから伝わったとされる。ゆるやかな導入部ラッシューと急速な主部フリッシュからなっている）の形式でまとめたピアノ独奏曲ですが、このうちの6曲はリスト自身やドップラーによって管弦楽用に編曲されました。なかでも第2番は特に知られており管弦楽版でも人気の高い名曲です。

ショパン：ピアノ協奏曲第２番ヘ短調作品21

ショパンの2曲あるピアノ協奏曲は、第2番が1829年に作られ、第1番は1830年に完成しました。しかし、出版は第1番が1833年、第2番は1836年と、あとだったため作曲年と逆になっていますが、ショパン初めてのピアノ協奏曲が第2番です。この頃、ショパンは皇室離宮の管理者の娘で声楽を学んでいたコンスタンツィア・グラドコフスカに恋していました。この曲のノクターン風の美しい第2楽章は初恋の人コンスタンツィアへの思いから生まれたことが知られています。1830年3月17日にワルシャワでショパン自身のピアノで初演、パリで親交を持ったデルフィナ・ポトツカ伯爵夫人に献呈されました。完成度では第1番の方が上かも知れませんが、初々しい瑞々しさは第1番より魅力的かも知れません。ロマン派ピアノ協奏曲の名曲のひとつ。

第1楽章　マエストーソ　　第2楽章　ラルゲット　　第3楽章　アレグロ・ヴィヴァーチェ

グリーグ：ソルヴェーグの歌（劇音楽“ペール・ギュント”から）
グリーグ：春（“12の歌”作品33から第２曲）

1875年に作曲された劇音楽「ペール・ギュント」はヘンリク・イプセンが1867年に発表した戯曲に音楽を付けた作品です。物語は「粗暴で未来を夢みる、貧しい農家の一人息子ペールは結婚式場から花嫁を奪って生活しますが、山に逃げ出し、さまよい歩くペールを救ったソルヴェーグをも捨て、苦悩と幻想のなかで年老い、たどり着いた故郷に待っていたソルヴェーグに抱かれて息絶えるのでした」というもので、後に1888年に第1組曲、1891年に第2組曲が演奏会用にまとめられグリーグの代表作として親しまれています。**「ソルヴェーグの歌」**は待ち続けて戻って来たペールに歌つて聞かせる子守り歌で、作品中最も有名な一曲です。**「春」**は1880年に作曲されたノルウエーの詩人ヴェンシエの詩による「12の歌」の中の一曲ですが、死期が近いことを悟った老人が、また春の訪れを感じることが出来た喜びを歌っています。グリーグは翌1881年、この曲と第3曲の「胸のいたみ」を「二つの悲しい旋律」作品34として弦楽合奏用に編曲しました。こちらの曲で知っている方も多いかも知れません。甘い憂愁につつまれた名作です。

ベートーヴェン：交響曲第７番イ長調作品92

第5番と第6番が同じ時期に双子のように生まれたように、この第7番も第8番と双子のような形で1812年に作曲され、第5番と第6番の初演から５年後の1813年12月８日、ウィーンでベートーヴェン自身の指揮で初演され、圧倒的な拍手で迎えられました。この曲の最大の特徴はリズムを重用して全曲を貫いていることで、リストはこの曲を「リズムの神化」と言い、ワーグナーは「舞踏の神化」と形容したことはよく知られています。第2楽章だけが短調で書かかれ、葬送行進曲風の厳粛で叙情的な雰囲気を持っていますが、一定したリズムは躍動する他の楽章と共通する部分があり、リズムの交響曲に花を添える素晴らしい楽章となっています。ベートーヴェンの交響曲を代表する傑作のひとつ。

第1楽章　ポコ・ソステヌートーヴィヴァーチェ　　第2楽章　アレグレット
第3楽章　プレスト　　第4楽章　アレグロ・コン・ブリオ